リオデジャネイロオリンピックの開幕を８月に控え，郷土のオリンピック選手の近況とオリンピックでの活躍を伝える徳島新聞の記事に穴吹高校の卒業生２名が紹介されました。

徳島新聞４月２４日朝刊

※櫻間幸次さんは，穴吹高校華の丘同窓会の会長でもあります。

郷土のオリンピアン ④

柔道参考に大技磨く

レスリング 桜間幸次(78)

東京・フェザー級４位

徳島県関係のオリンピアン47人のうち、陸上の9人に次いで出場選手が多いのがレスリングの7人だ。中でも美馬市穴吹町の桜間幸次(78)＝穴吹高＝日体大出＝は1964年の東京、68年のメキシコと2大会連続で入賞を果たし、日本のグレコローマンスタイルの草分けとされている。

身長156㌢と小柄で子どもの頃は決してスポーツ少年でなかった。レスリングを始めたのは穴吹高2年の時。校内大会で優勝したのがきっかけで当時、県内の柔道、重量挙げの第一人者だった吉田廣一教諭が立ち上げたレスリング部に飛び込んだ。部員はわずか2人だったとはいえ、練習は楽しく、3年時は国体5位と活躍。人生を懸けてレスリングを追求しようと決意した。

日体大進学を目指し、東京の予備校で勉強していた56年、メルボルン大会で日本人選手が躍動する姿を見て感動。「小柄な自分でもレスリングなら五輪で世界一になれる」と、都内のレスリングクラブに通い、力を伸ばした。

強くなるために参考にしたのが柔道だった。「格闘技で大事なのは基本の姿勢。柔道は何度も形を繰り返す」。地道に練習を繰り返し、相手の体を豪快に後ろへ投げる大技に磨きをかけた。

国内予選で敗れ、60年のローマ大会には出場できなかったが、東京大会では本来より一つ上の階級のフェザー級で代表入り。身長は出場選手中、一番低かったが「吉田先生に学んだ重量挙げのバーベルなどを使う肉体強化で、体形はがっちりしていた」。秘めたパワーを存分に発揮して5回戦まで勝ち進んだものの、銀メダルのルルア（旧ソ連）に敗れて4位に終わった。4年後のメキシコ大会ではバンタム級で再び代表に選ばれたが、また5回戦で優勝したバルガ（ハンガリー）に惜敗。「技をかけることにこだわり過ぎた」と苦笑いする。

その後は日本選手団監督や団長などを歴任。世界選手権などを転戦する中で、選手に実力を発揮させるため、時差をどう克服するかなどの研究にも取り組んだ。

90年に自衛隊体育学校を退官。その後は徳島文理大で教壇に立ちながら、高校生選手の減量や競技力向上に関する研究を深め、著書も出版した。「五輪のメダルに手が届かなかった悔しさが探究のエネルギーになったのかも」と振り返る。

かつては「徳島のお家芸」と呼ばれたレスリング。しかし、近年は有力選手が生まれていない。「世界で戦うという高い意識を持って練習すればきっと強くなれる」と後輩たちの活躍を期待している。

（文中敬称略、平尾貴宏）

東京大会のブレザーを着用し、当時の思い出を語る元レスリング代表の桜間＝穴吹高オリンピック記念資料室

徳島県関係の選手と成績

【レスリング】
（いずれもグレコローマン）

◇東京（1964年）
藤田　徳明　ライト級　４位
桜間　幸次　フェザー級　４位
◇メキシコ（1968年）
桜間　幸次　バンタム級　５位
藤本　英男　フェザー級　銀
◇ミュンヘン（1972年）
藤本　英男　62キロ級　４位
◇モントリオール（1976年）
高西　一宏　82キロ級　６位
◇ロサンゼルス（1984年）
藤田　芳弘　100キロ級　７位
◇バルセロナ（1992年）
森　巧　68キロ級　2回戦敗退
◇アテネ（2004年）
豊田　雅俊　55キロ級　10位

郷土のオリンピアン ①

徳島新聞4月20日朝刊

諦めず終盤スパート

競泳 柴田亜衣(33)

アテネ・女子800自で金

優勝を示す電光掲示板を見て、思わず右手を高く突き上げた。2004年のアテネ五輪。日本の女子競泳陣で初めて自由形で金メダルを獲得した柴田亜衣(33)=スイミングアドバイザー、穴吹高―鹿屋体大出=は、コーチの言葉を支えに800㍍を泳ぎ切った。

2種目に出場し、最初の400㍍は自己ベストをマークして5位。「国際大会の本番で自己新を出せた」と、好調を実感する。半面「予選は全体の4位だったのに、決勝で一つ順位を下げた悔しさが心の片隅に残っていた」と明かす。

迎えた800㍍決勝。予選3位の柴田は第3レーン。隣の第4レーンは先の400㍍でフランス女子競泳陣として初の金メダルに輝き、2冠を狙うマナドゥだった。

レース前、「メダルがとれるかも」と意気込む柴田を落ち着かせてくれたのが、鹿屋体大の田中孝夫コーチだった。ウオーミングアップを終えた柴田に「いつも通り慌てず、焦らず、諦めず、泳いできなさい」と声を掛けた。

柴田はコーチの言葉を心の中で反すうしながらマナドゥを追走。500㍍を過ぎてマナドゥのペースが落ち始めると猛然と追い上げ、残り50㍍で並んだ。苦しかったが「こんなに泳いで負けるのは嫌」と、諦めずにスパート。自己記録を3秒近く縮める8分24秒54で優勝した。

五輪で結果を出すことを本気で意識したのは、前年の世界選手権だった。3種目に出場したが決勝に残れず、スタンドから仲間を応援した。「悔しかった。本気で世界と勝負したいと思った」。田中コーチに「どうしても五輪に出たい」と訴え、連日20キロを超す猛練習に取り組むことを決意した。

五輪の舞台に立った徳島県関係の選手で、メダルを手にしたのは8人いるが、正式競技での金は柴田だけ。前評判を覆す形で「シンデレラストーリー」を体現した。

アテネ大会後、金メダリストの肩書きが重くのしかかった。「大きな試合のたび、メダルを取らなくちゃいけないというプレッシャーと闘っていた」と振り返る。08年の北京大会は400㍍、800㍍ともに予選落ち。同年12月に引退した。

現役時代を振り返り、「メダルを取ることだけが五輪ではないと思うときがある」と言う。「全力を尽くしてもメダルを取れない選手は大勢いる。でもみんなメダリストと同じように努力している」と強調する。

引退後は徳島を含め、各地の水泳教室や講演会で水泳をはじめ、各種の普及振興に務めている。夢は水泳嫌いの子どもを減らすこと。「水泳を通じて、失敗から成長することや、目標に挑み続けることの大切さを学んでくれたら」。真っ黒に日焼けして泳いだ少女時代の笑顔が戻った。

◇

リオデジャネイロ五輪の開幕は8月5日。4年前のロンドンまで過去30回の夏季大会で、徳島県関係は47人(男子33人、女子14人)が16競技に出場し、名勝負を繰り広げてきた。郷土のオリンピアンの近況を交えつつ、その足跡と成績を紹介する。

(文中敬称略、平尾貴宏)

女子800㍍自由形で金メダルに輝いたアテネ大会を振り返る柴田=川崎市内

徳島県関係の選手と成績

【競　泳】

◇バルセロナ(1992年)			
バンデワーレ泰広	男子100㍍背泳ぎ	9位
	男子200㍍背泳ぎ	14位
◇アトランタ(1996年)			
源　純夏	女子50㍍自由形	12位
	女子100㍍自由形	予選敗退
	女子400㍍リレー	12位
◇シドニー(2000年)			
源　純夏	女子50㍍自由形	8位
	女子100㍍自由形	7位
	女子400㍍メドレーリレー	銅
◇アテネ(2004年)			
永井　奉子	女子100㍍自由形	16位
	女子200㍍自由形	13位
	女子400㍍メドレーリレー	5位
柴田　亜衣	女子400㍍自由形	5位
	女子800㍍自由形	金
◇北京(2008年)			
柴田　亜衣	女子400㍍自由形	31位
	女子800㍍自由形	27位